

日本語版 Lifespan Sibling Relationship Scale の作成 および信頼性・妥当性の検討^{1, 2}

立教大学大学院現代心理学研究科博士課程前期課程 1 年 熊谷 政人

Reliability and Validity of the Japanese Version of the Lifespan Sibling Relationship Scale

Masato Kumagai (Graduate School of Contemporary Psychology, Rikkyo University)

The purpose of the study was to translate the Lifespan Sibling Relationship Scale (LSRS) from English to Japanese and evaluate its reliability and validity. The study sample included 93 undergraduate students. Results indicated that the Japanese version of LSRS had 2 dimensions related to adulthood and childhood: close interaction with the sibling, faith toward the sibling in adulthood and affect toward the sibling, collaborative relationship with the sibling in childhood. These factors indicated high internal consistency. The Japanese version of LSRS and each of its factors was associated with social support and stressors in the sibling relationship. Based on these results, the reliability and validity of Japanese version of LSRS were confirmed.

Key words: Sibling Relationship, Reliability, Validity

きょうだい関係は人間のパーソナリティやコミュニケーション能力の形成に大きく影響を及ぼす要因であると考えられる。そもそも、きょうだい関係は人間関係の中で特殊な存在である。依田 (1990) は、きょうだい関係は「タテ」の人間関係と「ヨコ」の人間関係から成り立っている「ナナメ」の人間関係と呼ぶことができ、親子

関係とも友人関係とも違うと述べている。また、きょうだいが親密であるほど、抑うつ状態になりにくいことやアイデンティティへのコミットメントの高さは、きょうだいのサポートに正の関連があることが示されている (Kim, McHale, Crouter, & Osgood, 2007; Crocetti, Branje, Rubini, Koot, & Meeus, 2017)。これらの先行研究からきょうだい関係は個人の精神的健康や発達にも密接に関連があり、親子関係や友人関係の研究に加え、きょうだい研究の必要性があると考えられる。

日本におけるきょうだい関係についての量的研究には、磯崎 (2008) や森川 (2014) が青年期におけるきょうだい関係と友人関係の比較を、武田・熊谷 (2015) が知的障害の有無によるきょうだい関係の相違を研究しており、きょうだいがいる対象者全般に対する研究であった。上記の量的研究の尺度において、森川 (2014) は、飯野 (1994) によって作成されたきょうだい関係

¹ 本研究は、平成 30 年度に立教大学現代心理学部心理学科に提出した卒業論文の一部を加筆・修正したものである。

² 本論文の作成におけるバックトランスレーションにあたり、多大なご協力をいただいた立教大学現代心理学部の浅野倫子先生、東北大学国際文化研究科の中山真里子先生、Lifespan Sibling Relationship Scale の原著者であり、日本語版作成の快諾およびバックトランスレーションに関する貴重なご助言をいただきました Dr. Riggio, H. R. (California State University) に心より感謝申し上げます。そして、本研究の作成全体にあたり、丁寧な指導して下さった立教大学現代心理学部の林もも子先生に厚く御礼申し上げます。

尺度を使用し、武田・熊谷（2015）は Furman & Buhrmester（1985）が作成した Sibling Relationship Questionnaire（以下、SRQ とする）を改訂した日本版を使用していた。しかし、これらのきょうだい関係尺度は 20 年以上前に作成されたものであり、現代のきょうだい関係を測定する尺度としては妥当性が低くなっている可能性がある。そのため、本研究では、より妥当な尺度を用いてきょうだいに関する量的研究を行うために Riggio（2000）が作成した Lifespan Sibling Relationship Scale（以下、LSRS とする）の日本語版を作成し、信頼性、妥当性の検討を目的とした。LSRS 以前に海外で作成されたきょうだい研究において用いられる尺度としては Furman & Buhrmester（1985）が作成した SRQ や Stocker, Lanthier, & Furman（1997）が作成した Adult Sibling Relationship Questionnaire（以下、ASRQ とする）が挙げられる。

SRQ は、小学校高学年にインタビュー調査に基づいて作成されたきょうだい関係尺度であり、子どもを対象としたきょうだい関係尺度である。日本でこの SRQ を用いた研究である武田・熊谷（2015）では、知的障害の有無できょうだい関係に違いがあるかを調査するために、SRQ を邦訳した「日本版きょうだい関係質問紙」の信頼性と妥当性の検討を行った。因子分析の結果、原版 SRQ では「父による偏愛」と「母による偏愛」という項目が尺度に含まれていたが、日本語版 SRQ では含まれなかった。また、原版 SRQ では「温かさ・親密さ」、「地位・力関係」、「葛藤」、「ライバル」の 4 因子であったが、日本語版 SRQ では「温かさ・親密さ」、「力関係」の 2 因子となった。武田・熊谷（2015）はこれらの原版と日本語版の相違には、アメリカと日本の文化的背景の差異が影響しただろうと述べている。しかし、原版 SRQ は 1985 年に作成されたものであるが、日本語版 SRQ は 20 年後の 2015 年に信頼性および妥当性の検討を行っているため、時代の違いの影響を受けた可能性も考えられる。

SRQ は主に、小児期のきょうだい関係を測定するきょうだい尺度であり、成人期のきょうだ

い関係を測定するには適していない。そこで、Stocker et al.（1997）は成人期のきょうだい関係を測定するための ASRQ を作成した。ASRQ の信頼性と妥当性の調査は大学生を対象として行われた。

ASRQ の次に作成されたものが LSRS である。LSRS は ASRQ と同様に大学生を対象として信頼性および妥当性の調査を行っている。LSRS は人生を通して親子関係の次に長く関係し続けるきょうだい関係について測定するものであり、幼児期や成人期だけでなく、中年期、さらには老年期まで測定することを想定して作成された。また、ASRQ は 81 項目であったのに対して、LSRS は 48 項目で項目数が少ない上に包括的な尺度である。LSRS は、項目数が少ないため集団法に適している。Riggio（2000）は幼児期に比べて、成人期以降はきょうだいとの口論や敵対心が減っていくと考え、きょうだい関係のネガティブな側面の項目を減らしている。したがって、LSRS はきょうだい関係のポジティブな側面を測定する面において優れている。

LSRS の因子構造として、Riggio（2000）は、「愛情 (Affect)」、「行動 (Behavior)」、「認知 (Cognition)」の 3 因子構造とした。すなわち、LSRS はきょうだいに対する好意的な感情、きょうだいとの物理的な交流、きょうだいについての認識を測定しており、きょうだい関係の要素がより明確にされている尺度である。また、LSRS の各因子はさらに幼少期と成人期に分かれて、別の因子としており、過去のきょうだい関係を回顧的に測定する場合や現在のきょうだい関係を測定する場合とそれぞれに対応できるきょうだい尺度である。

以上のことから、LSRS は青年期以降のきょうだい関係を集団法での測定に適した尺度であると考えられたが、LSRS には日本語版が存在しない。本研究は日本語版 LSRS を作成し、その信頼性と妥当性を検討することを目的とした。

信頼性の検討としては、LSRS を邦訳したものに対して、幼少期と成人期に分けて、それぞれ因子構造を確認した後、因子ごとにクロンバックの

α 係数による信頼性分析を行った。また、妥当性の検討としては、Riggio (2000) による LSRS の妥当性検討に基づき、きょうだいとのソーシャルサポート、きょうだいとのポジティブとネガティブ両面における関係性、社会的望ましさと併存的妥当性を検討した。

方法

調査参加者と手続き

きょうだいがいる関東圏内の私立4年制大学に通う大学生93名(18歳から53歳までの男性24名、女性69名、平均年齢19.8歳、 $SD=4.3$)であった。2018年1月16日において、大学の講義を通して集団調査法で実施した。調査はきょうだいがいる人を対象として無記名で行われた。

尺度構成

質問紙は以下のフェイス項目と5つの尺度から構成した。

フェイス項目 性別、年齢、学年、現在の居住形態、調査対象者のきょうだいについての回答を求めた。調査対象者のきょうだいに関する質問には、きょうだいの種類、年齢差、きょうだいとの現在の居住形態、同居年数、別居経験がある場合には別居年数の回答を求めた。また、LSRS、ソーシャルサポート尺度、対人ストレッサー尺度、友人関係尺度においては、1人を想定して回答してもらうために、きょうだい2人以上の場合は、最も仲が良いと思われるきょうだいについての回答を求めた。

Lifespan Sibling Relationship Scale (生涯きょうだい関係尺度: LSRS) この尺度はRiggio (2000) が作成したものであり、日本語に翻訳した後、バックトランスレーションを行った。バックトランスレーションの英訳と原版を対比させる作業を原著者に依頼し、また、原著者から日本語版作成の許可を得た。原版の項目にあった「I call my sibling on the telephone frequently.」はメールや Social Networking Service (以下、SNS とする)

等の連絡手段が多様化している現代の背景に即して、バックトランスレーションの際に「I contact my sibling frequently.」と英訳し、「私は私のきょうだいに頻繁に連絡をとる。」と邦訳した。この尺度はきょうだいとの関係性を測定する尺度であり、下位尺度において、「成人期」と「幼少期」の2つの時期とそれぞれの時期に「Affect:愛情」、「Behavior:行動」、「Cognition:認知」の3つの側面を示す6因子構造であった。6因子それぞれは、8項目ずつからなり、計48項目あった。評定方法として「まったくあてはまらない」から「非常によくあてはまる」の5件法で回答を求めた。合計得点が高いほど、きょうだいとの関係性が良いことを示している。

LSRSの日本語版の妥当性を検討するために、原版のLSRS作成時の妥当性検討を参考にして、以下の尺度を使用し、併存的妥当性を検討した。

ソーシャルサポート尺度 原版のLSRS作成時の妥当性検討にソーシャルサポート行動尺度が使用されていたため、細田・田嶋(2009)のソーシャルサポート尺度を使用した。本尺度は、細田・田嶋(2009)において、妥当性と信頼性が確認された。因子構造は、「共行動的サポート」、「道具的サポート」、「情緒的サポート」の3因子構造だった。本研究では15項目全ての項目を使用した。評定方法として「全くない」から「よくある」の5件法で回答を求めた。合計得点が高いほど、その人物からのサポートを多く受けていると知覚していることを示している。本研究ではきょうだいを想起しながら項目に回答させることにより、きょうだいからのソーシャルサポートの知覚を測定した。

対人ストレッサー尺度 原版では、LSRS作成時の妥当性検討にStocker et al. (1997)のASRQを使用していた。この尺度は、きょうだいとの関係を受容、尊敬、愛情、敵意、競争、支配、情緒的サポート、親密性、道具的サポート、知識、母親敵対、父親敵対、口論、類似性の14因子で測定する。しかし、ASRQの日本語版が存在しなかったため、きょうだい関係におけるネガティブな側面を測定するために、高橋(2013)の対人ストレッ

サー尺度を使用した。本尺度は、高橋（2013）において、信頼性と妥当性が確認された。この尺度の因子構造は「被拒否」、「被攻撃」、「加害」、「関係理解不能」の4因子であり、項目数は25項目であった。その中から「被拒否」、「被攻撃」、「加害」の3因子20項目を使用した。評定方法として「まったくあてはまらない」から「かなりあてはまる」の5件法で回答を求めた。本研究では、質問項目の「相手」の部分を「きょうだい」に置き換え、また、きょうだいを想起しながら回答するよう教示した。合計点数が高いほど、きょうだいとの対人ストレスを感じていることを示している。

友人関係尺度 原版のLSRS作成時の妥当性検討に使用されていたStocker et al. (1997)のASRQが測定したきょうだい関係におけるポジティブな側面を測定するため、安井・谷（2008）の友人関係尺度を使用した。本尺度は、安井・谷（2008）において、信頼性が確認されていた。この尺度の因子構造は「友人への信頼」、「友人からの肯定的な影響」、「やさしさ志向」、「密着・同調志向」の4因子であり、項目数は40項目であった。その中から「友人への信頼」、「友人からの肯定的な影響」、「密着・同調志向」の3因子30項目を使用した。評定方法として「まったくあてはまらない」から「非常にあてはまる」の6件法で回答を求めた。本研究では、質問項目の「友達」の部分を「きょうだい」に置き換え、また、きょうだいを想起しながら回答するよう教示した。合計点数が高いほど、きょうだいとの関係性が良いことを示している。

モーズレイ性格検査 (Maudsley Personality Inventory：以下MPIと表す) のL尺度 原版のLSRS作成時の妥当性検討に社会的望ましき尺度が使用されていたため、MPI研究会（2000）によって作成されたMPIのL尺度を使用した。MPIのL尺度は、ミネソタ多面人格目録 (Minnesota Multiphasic Personality Inventory：以下、MMPIとする) に含まれている虚偽発見尺度 (L) 20項目を用いている (岩脇, 1969)。また、MMPI

の虚偽発見尺度の再検査信頼性と妥当性は、Dahlstrom & Dahlstrom (1980 阿部・小野 1984)において、確認された。L尺度は20項目あり、その中から「約束の時間や仕事の時間におくれたことがありますか」や「勝負事には負けるよりも勝ちたいですか」などの5項目を使用した。評定方法として「いいえ」から「はい」の3件法で回答を求めた。合計点数が高いほど、社会的望ましきさが低いことを示している。

結果

まず、LSRSの全48項目の記述統計をもとに、得点の分布を検討したところ、天井効果と床効果は認められなかった。

次に、成人期のきょうだいとの関係性を測定する成人期についてのLSRSの24項目について因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行い、各因子に.35以上の高い負荷量を示した項目により各尺度を構成した結果、2因子構造と判断された (Table1)。なお、両方の因子に.35以上の高い負荷を示した1項目は除外した後、再度、因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行った。第1因子は、「私は自分が私のきょうだいにとって親友の一人だということを分かっている。」、「私のきょうだいと私はたくさんのことを一緒にする。」などの10項目に高く負荷しており、「きょうだいとの親しい交流」因子と命名した。第2因子は、「私は私のきょうだいを尊敬する。」、「私は私のきょうだいを誇りに思っている」などの13項目に高く負荷しており、「きょうだいへの信頼感」因子と命名した。また、各因子においてクロンバックの α 係数を用いた信頼性分析をしたところ、「きょうだいとの親しい交流」因子においては $\alpha = .92$ を示し、「きょうだいへの信頼感」因子においては $\alpha = .93$ という高い内的一貫性が示された。

また、幼少期のきょうだいとの関係性を測定する幼少期についてのLSRSの24項目について因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行い、

Table 1
成人期 Lifespan Sibling Relationship Scale (LSRS) の探索的因子分析

項目	I	II
I : きょうだいとの親しい交流 ($\alpha = .92$)		
23.私は自分が私のきょうだいにとって親友の一人だということを分かっている。	.92	-.17
15.私のきょうだいと私はたくさんを一緒にする。	.86	-.03
10.私のきょうだいと私は一緒に遊びに行く。	.76	-.01
6.今現在、私は私のきょうだいとたくさん時間を過ごしている。	.75	-.02
18.私のきょうだいは私の親友の一人だ。	.75	.03
12.私は私のきょうだいに頻繁に連絡をとる。	.73	-.03
7.私のきょうだいは個人的な問題について私に話す。	.73	.05
13.私のきょうだいと私には共通点がたくさんある。	.69	-.02
17.私のきょうだいはよい友達である。	.62	.13
22.私のきょうだいと私だけの秘密がある。	.60	.05
II : きょうだいへの信頼感 ($\alpha = .93$)		
16.私のきょうだいは私の人生において非常に重要な存在である。	.02	.88
8.私のきょうだいは私を幸せな気持ちにしてくれる。	.08	.86
9.私は私のきょうだいとの仲が楽しい。	.08	.84
21.私は私のきょうだいを尊敬する。	-.04	.82
4.私は私のきょうだいを誇りに思っている。	.03	.78
19.私のきょうだいと私はそれほど親しくない。*	.01	.77
11.私は私のきょうだいと一緒に時間を過ごすことが好きである。	.31	.62
20.私のきょうだいの気持ちは私にとって非常に大切である。	.25	.52
24.私のきょうだいは私をすごく怒らせることがよくある。*	-.23	.43
3.私は私のきょうだいにとって、非常に重要な存在であると思う。	.28	.43
5.私のきょうだいと私はお互いにものを貸し借りする。	.27	.42
1.私は自分が抱えている問題について私のきょうだいとは決して話さない。*	.21	.40
2.私のきょうだいは私を誇りに思っている。	.23	.39
	因子間相関	
	II	.76

削除項目

14.私のきょうだいと私は一緒に楽しいことをたくさんする。

注) *は逆転項目

各因子に .35 以上の高い負荷量を示した項目により各尺度を構成した結果、2 因子構造と判断された (Table2)。なお、両方の因子に .35 以上の高い負荷を示した 4 項目は除外した後、再度、因子分析 (主因子法、プロマックス回転) を行った。第 1 因子は、「子どもの頃、私のきょうだいは非常にうっとうしかった。(逆転項目)」、「子どもの頃、私は私のきょうだいと時間を過ごすことを楽しんだ。」などの 11 項目に高く負荷しており、「きょうだいへの愛情」因子と命名した。第 2 因子は、「子どもの頃、私のきょうだいと私の友人は共通

していることが多かった。」、「子どもの頃、私のきょうだいと私は同じものばかりが好きだった。」などの 9 項目に高く負荷しており、「きょうだいとの協同関係」因子と命名した。また、各因子においてクロンバックの α 係数を用いた信頼性分析をしたところ、「きょうだいへの愛情」因子においては $\alpha = .91$ を示し、「きょうだいとの協同関係」因子においては $\alpha = .87$ という高い内的一貫性が示された。

さらに、LSRS の併存的妥当性を検討するために、成人期および幼少期 LSRS の下位尺度および、

Table 2
幼少期 Lifespan Sibling Relationship Scale (LSRS) の探索的因子分析

項目	I	II
I : きょうだいへの愛情 ($\alpha = .91$)		
19.子どもの頃、私のきょうだいは非常にうっとうしかった。*	.87	.07
9.子どもの頃、私は私のきょうだいと時間を過ごすことを楽しんだ。	.81	.07
3.子どもの頃、私のきょうだいは私と遊ぶことが好きでなかった。*	.76	-.32
12.子どもの頃、私のきょうだいと私は非常に親しかった。	.75	.21
14.子どもの頃、私は私のきょうだいを非常に親しいと感じていたことを覚えている。	.72	-.09
7.子どもの頃、私のきょうだいと私はよく一緒に遊んだ。	.71	.23
8.子どもの頃、私のきょうだいを非常に大好きだったことを覚えている。	.70	.20
6.子どもの頃、私のきょうだいは私の世話をした（または、私が私のきょうだいの世話をした）。	.69	-.12
1.子どもの頃、私は私のきょうだいを誇りに思っていた。	.54	-.20
15.子どもの頃、私のきょうだいと私は一緒に時間を過ごすことはあまりなかった。*	.54	.22
24.子どもの頃、私のきょうだいは私を惨めな思いにさせた。*	.36	-.09
II : きょうだいとの協同関係 ($\alpha = .87$)		
21.子どもの頃、私のきょうだいと私の友人は共通していることが多かった。	-.27	.87
11.子どもの頃、私のきょうだいと私は同じものばかりが好きだった。	.00	.78
18.子どもの頃、私のきょうだいと私は「相棒」だった。	-.20	.76
17.子どもの頃、私のきょうだいと私は放課後と一緒に過ごした。	-.21	.72
2.子どもの頃、私のきょうだいと私だけの秘密があった。	.01	.69
12.子どもの頃、私のきょうだいと私はよく助け合った。	.12	.62
10.子どもの頃、私のきょうだいと私にはたくさんの共通点があった。	.23	.53
4.子どもの頃、私のきょうだいは私のすべてを知っていた。	-.07	.53
5.子どもの頃、私は私のきょうだいに自分が抱える問題について話した。	.12	.52
	因子間相関	
	II	.60

削除項目

- 13.子どもの頃、私のきょうだいと私は楽しいことをたくさんしたのを覚えている。
 16.子どもの頃、私のきょうだいと私に重要で、そしてポジティブな影響を与えた。
 20.子どもの頃、私は頻繁に私のきょうだいに腹を立てていた。*
 23.子どもの頃、私のきょうだいと私はお互いにとって非常に重要な存在だった。

注) *は逆転項目

Table 3
日本語版 Lifespan Sibling Relationship Scale (LSRS) の下位尺度および合計得点と他尺度との相関

	M	SD	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
1.きょうだいとの親しい交流	26.2	9.27	-	.76**	.44**	.74**	.93**	.64**	.88**	.74**	-.30**	.77**	.14
2.きょうだいへの信頼感	43.5	10.88		-	.54**	.56**	.95**	.60**	.88**	.83**	-.43**	.84**	.12
3.きょうだいへの愛情	38.2	8.87			-	.60**	.53**	.92**	.77**	.45**	-.40**	.44**	.09
4.きょうだいとの協同関係	22.7	6.97				-	.68**	.87**	.84**	.59**	-.26*	.62**	.13
5.成人期LSRS	69.8	19.05					-	.66**	.94**	.84**	-.39**	.87**	.14
6.幼児期LSRS	60.8	14.20						-	.88**	.56**	-.38**	.58**	.11
7.LSRS合計得点	130.6	30.27							-	.79**	-.41**	.81**	.13
8.ソーシャルサポート	41.5	12.91								-	-.25*	.90**	.10
9.対人ストレスサー	40.8	12.39									-	-.28*	-.20
10.友人関係	84.8	21.92										-	.10
11.L尺度	1.9	1.65											-

注) * $p < .05$, ** $p < .01$ を表す。

時期ごとの合計得点、LSRSの全体合計得点と他尺度との相関分析を行った (Table3)。その結果、きょうだいとの親しい交流はソーシャルサポート尺度 ($r = .74, p < .01$)、友人関係尺度 ($r = .77, p < .01$) と正の相関があり、対人ストレス尺度と負の相関があった ($r = -.30, p < .01$)。また、きょうだいへの信頼感はソーシャルサポート尺度 ($r = .83, p < .01$)、友人関係尺度 ($r = .84, p < .01$) と正の相関があり、対人ストレス尺度と負の相関があった ($r = -.43, p < .01$)。さらに、きょうだいへの愛情はソーシャルサポート尺度 ($r = .44, p < .01$)、友人関係尺度 ($r = .45, p < .01$) と正の相関があり、対人ストレス尺度と負の相関があった ($r = -.40, p < .01$)。そして、きょうだいとの協同関係はソーシャルサポート尺度 ($r = .59, p < .01$)、友人関係尺度 ($r = .62, p < .01$) と正の相関があり、対人ストレス尺度と負の相関があった ($r = -.26, p < .05$)。なお、LSRSの各下位尺度および時期、全体の合計得点はL尺度とは相関がなかった。

考察

本研究の目的はきょうだいの関係尺度であるLSRSの日本語版を作成し、信頼性と妥当性を検討することであった。まず、LSRSの成人期と幼少期の項目それぞれに探索的因子分析を実施した。原版の研究における因子分析は成人期と幼少期の項目を一緒にして因子分析を行っているが、成人期と幼少期の項目の内容が時系列的に異なると判断したため、本研究ではそれぞれで因子分析を行った。その結果、LSRSの成人期の項目において、原版では「愛情」、「行動」、「認知」の3因子構造であったが、「きょうだいとの親しい交流」と「きょうだいへの信頼感」の2因子構造と判断された。原版が3因子構造であったのに対して、本研究では2因子構造となったのは、「認知」の項目が2因子に分かれたことが原因であると考えられる。LSRSの成人期の一つの因子において、「私は自分が私のきょうだいにとって親友の一人

だということを知っている。」、「私のきょうだいは私の親友の一人だ。」という原版の「認知」因子に含まれていた項目が原版の「行動」因子の多くの項目とともに負荷していた。つまり、きょうだいにおける交流は親しみを持って行われるものであると判断されたため、きょうだいへの親しいという認知面ときょうだいとの交流という行動面が同じ「きょうだいとの親しい交流」因子となったと考えられる。もう一つの因子である「きょうだいへの信頼感」因子には原版の「行動」因子が混じっていたものの、きょうだいに対する思いを表す原版の「愛情」、「認知」因子が多く「きょうだいへの信頼感」因子に負荷していた。また、「私は私のきょうだいを尊敬する。」、「私のきょうだいは私を誇りに思っている。」などの尊敬や信頼の内容を含んでいたことから「きょうだいへの信頼感」因子と命名した。なお、各因子のクロンバックの α 係数を用いた信頼性分析をしたところ、高い内的一貫性を示し、成人期のLSRS因子の信頼性が確認された。

また、LSRSの幼少期の項目において、原版では「愛情」、「行動」、「認知」の3因子構造であったが、「きょうだいへの愛情」と「きょうだいとの協同関係」の2因子構造と判断された。原版が3因子構造であったのに対して、本研究が2因子構造となったのは、原版の「行動」因子と「認知」因子の相関が高かったことが原因であると考えられる。

Riggio (2000) において、幼少期の因子間相関の中で幼少期の「行動」因子と「認知」因子の相関が最も強かった ($r = .83$)。そのため、原版の「行動」因子と「認知」因子が分かれず同一因子としてまとまったと考えられる。そこで、原版の「愛情」因子ではほぼ構成されている因子は「きょうだいへの愛情」因子として命名し、原版の「行動」因子と「認知」因子で構成されている因子を内容から「きょうだいとの協同関係」因子と命名した。また、日本語版LSRSの幼少期の因子構造が原版のLSRSと異なった原因として、幼少期に回顧法を用いたため、記憶による回答の歪みが生じた可

能性がある。特に、LSRSの幼少期の項目は「子どもの頃、」と始まる文が多いため、回答者によって想起する時期が異なることが考えられる。つまり、想起する時期の違いから因子構造に乱れが生じ、原版と日本語版の因子構造の違いがみられたと考えられる。なお、各因子のクロンバックの α 係数を用いた信頼性分析をしたところ、高い内的一貫性を示し、幼少期のLSRS因子の信頼性が確認された。以上のことから、原版では3因子構造であったのに対し、日本語版では2因子構造になったものの、それぞれの因子の信頼性は高かったことから、日本語版LSRSの信頼性は確認されたと言える。また、現代ではSNSが普及し、きょうだいとの直接的な交流がなくても、きょうだいとコミュニケーションができるようになった。日本語版LSRSにおける成人期LSRSの因子が行動的側面と信頼的側面に分かれていたことから、日本語版LSRSはそのような現代の時代背景を反映したものであると考えられる。

次に、LSRSの併存的妥当性を検討するために、原版のLSRSの併存的妥当性検討に倣い、LSRSとソーシャルサポート尺度、対人ストレス尺度、友人関係尺度、L尺度との相関分析を行った。その結果、成人期と幼少期のきょうだい関係の各下位尺度およびLSRSの合計得点はソーシャルサポート尺度と友人関係尺度と正の相関があり、対人ストレス尺度と負の相関があった。また、L尺度とは相関がなかった。原版のLSRSの妥当性検討をしたRiggio (2000)において、ソーシャルサポート尺度とは幼少期の「行動」因子以外で正の相関があり、きょうだい関係を測定する尺度である、Stocker et al. (1997)のASRQにおけるきょうだい関係とのポジティブな側面とは正の相関があった一方、ネガティブな側面とは負の相関もしくは無相関であり、社会的望ましき尺度とは無相関であった。すなわち、日本語版LSRSは全体としては原版のLSRSと同様の結果だった。以上のことから日本語版LSRSの併存的妥当性が確認された。

本研究の問題点として、本研究ではきょうだい

が2人以上いた場合、質問紙の項目に対する回答はそのきょうだいの中で最も仲が良いと思われるきょうだいについてのものとしたため、きょうだいとの関係性が良好な回答に偏った可能性がある。一方、きょうだいが1人しかない場合にはきょうだいとの関係性が良好でない回答も含まれている。この問題を克服するためには、回答者のきょうだいの人数を加味した質問紙の構成にするか、回答者のきょうだいの人数を限定するべきである。また、標本数の少ないことも限界として挙げられるため、再検査信頼性を確認する点も含め、より多くの標本で再検査をすることが望まれる。

本研究では、日本語版LSRSを作成し、妥当性と信頼性を確認した。本研究の結果から、日本語版LSRSの成人期尺度は、きょうだいとの行動的側面と信頼的側面の測定に、幼少期尺度は、きょうだいへの好意的認識と信頼的認識の測定に適していると考えられ、信頼性と妥当性が確認された。日本語版LSRSは従来のきょうだい関係尺度に比べ、青年期以降を対象としており、きょうだい関係を2つのポジティブな側面のみから測定することで、項目数も少なく、きょうだい関係の測定を容易にすることを可能にした。そのため、日本語版LSRSはきょうだい関係に関する量的研究において活用が望まれる。

引用文献

- Crocetti, E., Branje, S., Rubini, M., Koot, H. M., & Meeus, W. (2017). Identity processes and parent-child and sibling relationships in adolescence: A five-wave multi-informant longitudinal study. *Child Development, 88*, 210-228.
- Dahlstrom, W. G., & Dahlstrom, L. (1980). *BASIC READINGS ON THE MMPI: A New Selection on Personality Measurement*. The University of Minnesota Press. (ダールストローム, W. G.・ダールストローム, L. 阿部 満州・小野 直広 (訳) (1984). *MMPI 原論* 新曜社)
- Furman, W., & Buhrmester, D. (1985). Children's

perceptions of the qualities of sibling relationships. *Child development*, 56, 448-461.

細田 絢・田嶋 誠一 (2009). 中学生におけるソーシャルサポートと自他への肯定感に関する研究 教育心理学研究, 57, 309-323.

飯野 晴美 (1994). きょうだい関係スケール 明治学院論叢, 541, 89-109.

磯崎 三喜年 (2008). 青年期におけるきょうだい関係と友人関係 国際基督教大学学報 I-A 教育研究, 50, 119-127.

岩脇 三良 (1969). モーズレイ性格検査の開発と適用 岩脇 三良・大山 正 (編) 新・性格検査法 (pp. 24-54) 誠信書房

Kim, J. Y., McHale, S. M., Crouter, A. C., & Osgood, D. W. (2007). Longitudinal linkages between sibling relationships and adjustment from middle childhood through adolescence. *Developmental psychology*, 43, 960-973.

森川 夏及 (2014). 家族システム論の観点から見た青年期のきょうだい関係に関する基礎研究 東北大学大学院教育研究科研究年報, 62(2), 133-143.

MPI 研究会 (2000). モーズレイ性格検査 誠信書房

Riggio, H. R. (2000). Measuring attitudes toward adult sibling relationships: The lifespan sibling relationship scale. *Journal of Social and Personal Relationships*, 17, 707-728.

Stocker, C. M., Lanthier, R. P., & Furman, W. (1997). Sibling relationships in early adulthood. *Journal of Family Psychology*, 11, 210-221.

高橋 幸子 (2013). 対人ストレス尺度作成の試み パーソナリティ研究, 21, 306-308.

武田 瑞穂・熊谷 恵子 (2015). 自閉症スペクトラム障害のある児童とそのきょうだい関係——行動問題と知的障害の有無の影響—— 特殊教育学研究, 53, 77-87.

安井 圭一・谷 冬彦 (2008). 現代青年の友人関係と自我同一性との関連 日本パーソナリティ心理学会大会発表論文集, 17, 212-213.

依田 明 (1990). きょうだいの研究 大日本図書

——2019.9.30 受稿, 2019.12.16 受理——